

# 初代歌川豊国の美人画に見る服飾描写

福田 博 美\*

## Fashionable Portrayal of Costumes in Bijinga by Utagawa Toyokuni I

Hiromi Fukuda

**要 旨** 初代歌川豊国（1769-1825）は、役者似顔絵に優れた評価を得た江戸後期の浮世絵師である。本稿では、美人画に見る服飾描写に着目し、他の絵師の表現と比較すると共に当時の随筆・洒落本・黄表紙・滑稽本・人情本と照合することからその特性を明確にするものである。

その結果、豊国の服飾描写にみる特性には、①写実性②独創性③流行の先導性が解明された。まず①に関して、小袖の黒・紫・鼠色の地色は、寛政から文化期（1789-1818）の渋みや地味を求めた表現であった。特に、紫は江戸紫と京紫を意識して取り入れたものである。模様は江戸褌と島原褌を描き、上方風を模倣した江戸の女性と江戸風を好んだ京坂の女性を表したのである。豊国が歌川派に伝えた教授法が写実性を重視した西洋画の画法に基づく点からも明らかである。次に②は、題材や背景描写に顕著であった。傾城を代表する猫を多く登場させた効果は興味深い。最後に③は、彼が一貫して黄表紙等の挿絵に従事し、そこで世相を捉え、式亭三馬（1776-1822）や山東京伝（1761-1816）との親交により、流行を察知し、それを先駆けて描写した点にある。すなわち、情報媒体としての浮世絵を先導したのである。

### 序 言

初代歌川豊国（1769-1825）は、江戸時代後期の代表的浮世絵師のひとりである（以下、豊国と表記）。特に役者似顔絵の人気は高く<sup>1)</sup>、明けても暮れても芝居、兄弟の顔より役者の顔を見たがる若い女中や娘たちは、それを肌身離さず大切に<sup>2)</sup>。子供たちにも評判は広まり、豊国の役者絵を掲載した合巻が出るたびに買い、葛籠に溜まっていたとあり<sup>3)</sup>、文政期（1818-30）には美人画の高名を得た<sup>4)</sup>。

拙稿で天明から文政期（1781-1830）の袋物や服飾品の形状・着装などの詳細な描写を浮世

絵に求めた際、豊国の作品に多く見出された。特に掛香では、紐の一部は喜多川歌麿（1753-1806）や菊川英山（1787-1867）にほぼ同数見られたが、その全形は豊国のみに描かれた<sup>5)</sup>。また、猫などを配する背景描写に独自性が推察される。そこで、本稿は、豊国の美人画にみる服飾描写に着目し、他の絵師の表現と比較すると共に当時の随筆・洒落本・黄表紙・滑稽本・人情本と照合することからその特性を明確にするものである。

### 1. 豊国の美人画における作画期の特色

豊国の美人画は、天明6（1786）年の絵暦に始まるとされ<sup>6)</sup>、文政8（1825）年1月7日享年57歳で逝去するまでの38年間に成る。中でも

\* 本学講師 日本服装史

寛政6（1794）年からの「役者舞台之姿絵」の成功は役者似顔絵師豊国を確立させ、美人画においても第1期の作画期を区別する。この時期は、絵暦、黄表紙などの草双紙の挿絵を主とし、師である豊春（1735-1814）の用いた遠近法を取り入れた浮絵の技法が背景描写に活用された。天明7（1787）年の絵暦「居眠り」に描かれた苧紡ぎの下女は、鳥居清長（1752-1815）が同3、4（1783、4）年に成る揃物「風俗東之錦」の「居睡り」と同様の構図を示した。錦絵では、天明末頃の「青楼夜の座敷」で通人が大きな紙入（どんぶり）を懐中した姿は、「どんぶりのおもみにてきものゝせがまがついてる」<sup>7)</sup>（天明6（1786）『客衆肝照子』）ように表現された。また、寛政5（1793）年の「高輪海岸の遊歩」では、緋色の紙入が黒緋地小袖に透けて描かれた。これは、衣類の透通りの画風<sup>8)</sup>をもつ清長の影響であり、この効果は次期の肉筆画にも活かされた。第2期は、寛政6（1794）年から寛政末（1801）を指す。「二美人図」を

はじめ多くの肉筆画や揃物「風流七小町略姿絵」「風流三幅対」「風流八景」などの錦絵に遊女や町人の流行が見られた。さらに、絵本の挿絵は、後の風俗絵本に繋がった。第3期の享和期（1801-4）には、豊春門下の豊広（1773-1828）との合作「両画十二候」を大判三枚続の連作で完成させ、江戸の風物詩を描いた。この頃、町人に加えて武家婦人の外出姿を描写し、享和2（1802）年「絵本時世粧」では公家風の立ち姿から武家婦人の室内の様子、町人の室内外から遊廓に至る広範囲の場面構成が見られる。文化元（1804）年、絵草紙の出版や販売は制限された。この年から文政初期（1804-1825）を第4期とする。前書の続編ともいえる「時世粧百姿画帖」が文政13（1830）年に完成し、装束の女性を宮女姿と明示し、風俗描写の集大成ともいえるものである。この時期、黄表紙・読本・滑稽本・合本の挿絵に力を注ぎ、式亭三馬（1776-1822）や山東京伝（1761-1816）との親交を深めた。豊国が他の絵師に比べて、武家女子の外

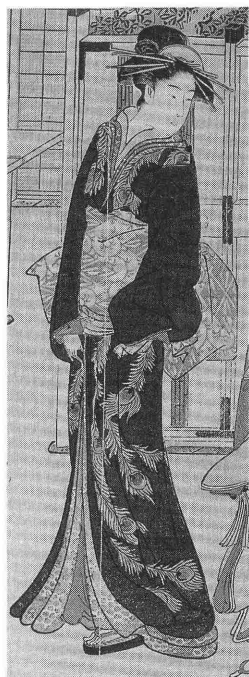


図1 島原棲の小袖



図2 額仕立ての下着



図3 ハツロの開いた留袖



図4 お化仕立ての襦袢

出姿を多く描いている点は、式亭三馬が奥女中の生活取材している(『浮世風呂』)ところと対応され、彼らとの関わりは、豊国の風俗描写に多大な影響を与えたものと推察される。

## 2. 豊国の美人画に見る服飾描写

### (1) 小袖の地色・模様・仕立て

#### 1) 黒・紫・鼠色の地色

寛政初期の「鹿茶屋」,「潮干狩」,寛政後期の「見立東下り」,「江の島詣」,寛政12~享和元(1800-1)年の「渡し船の役者たち」,享和元(1801)年の「豊広豊国両画十二候・四月」,享和初期の「室内の万歳見物」,「品川遊宴」,享和頃の「姫君の外出」,「海浜遊興」と寛政から享和期にかけて小袖の地色は、黒や紫に加えて鼠色も目立ち、渋みや地味を超えて暗い印象さえ与えかねない表現となっている。これは、127名の絵師伝を収めた慶応4(1868)年刊、竜田舎錦編『新增補浮世絵類考』に、豊国の画風は「黒と紫計りにて錦絵を書初む。」<sup>9)</sup>と記される通りである。

江戸後期、銭湯を舞台に町人の活発な会話を通じて世相を記した式亭三馬作の滑稽本、文化8(1811)年刊『浮世風呂』三編の下では、男性たちが若い女性の流行である路考茶などの青い着物を馬糞の衣と罵声し、鼠色や黒の姿は「どうもいへねへ風俗」と不評であった<sup>10)</sup>。同時期の絵師にこうした色彩が好まれなかった要因は、写実性より美を求めた結果かと思われる。しかし、安永9(1780)年に成る朋誠堂喜三二著の洒落本『古朽木』には、「流行のために賞せらるゝにあらねば、櫻とても同じく有来りの櫻色が、衣類でいへば黒小袖<sup>11)</sup>と記され、黒に格式を表したのである。また、豊国が多く用いた紫には、江戸を象徴する色彩として藍がかった紫色を江戸紫と称し、対する京坂では赤紫を京紫と区別した。文化6(1809)年の『浮世風呂』二編巻之上において上方の女が「こちや江戸むらさきなら大好々々。こちやあないな着物がしてほしいわエ。」<sup>12)</sup>と江戸紫を賞賛

している。上方風を嗜好した江戸の女性に対して逆の様子を示すものである。豊国の紫を分析すると双方の色合が見られ、江戸と京坂を意識して色彩を捉えていたと思われる。安永10(1781)年の洒落本『当世繁栄通宝』には、「まつ余国にないものが…江戸むらさき屋形舟と芝多び」<sup>13)</sup>とあり、豊国は「絵本時世粧」「時世粧百姿画帖」で舟に立つ遊女、「月下船美人図」では隅田川での屋形舟を描写している。この点から江戸を拠点に風俗を捉えていることが推定される。

#### 2) 江戸褌と島原褌

豊国の小袖模様において町人・武家の女性たちに江戸褌が見られた。但しここで注目されるのは、褌から衤にかけての江戸褌模様の他に寛政4~6(1792-4)年頃の図1には、襟に模様がかけられた孔雀の羽の模様が描写される点である。これは、安永10(1781)年の雛形本『新雛形曙櫻』の嶋原つまと同様の模様配置で表現されている。島原褌は、京都の島原の遊女の模様に由来する。当時、江戸の女性に上方風が好まれ、

なぜあんなに、上方風を嬉しがらうか気がしれねへよ。…上方の役者が始したことだッサ。…町方の女中が真似てする物だから、見やう見まねに江戸の女までが、此頃はちらほら真似やす。(文化8(1811)年『浮世風呂』)<sup>14)</sup>

と記されるように小袖にも島原褌を取り入れたのである。同様の描写は、寛政5(1793)年頃の「品川座敷の遊興」の立ち姿にみられた。

#### 3) 額仕立て・お化仕立て

当時最も流行した洒落本と賞される寛政2(1790)年刊山東京伝著『傾城買四十八手』には、「ひちりめんのどうに…額むく」<sup>15)</sup>と、いち早く額仕立て(外に見えない部分に安価な紅絹を用い、額縁のように外枠となる襟から衤、裾や袖口には別裂を付けた仕立て)を記している。管見では、文化9(1812)年の図2を初めとし、後に溪斎英泉(1790-1848)も同様の姿を描いた。

またこの時期、本来脇を塞いだ留袖にハツロが開けられた。同書には、「きせるの先でハツロをつゝきながら」<sup>16)</sup>とあり、文化5(1808)年の図3にその姿が確認できる。

さらに、当時の風俗を記した『飛鳥川』には、近來の流行、一ツの小袖へ見えがゝりの所計二ツにして、めをと小袖とぞ…工夫も有事にて昔なき事也<sup>17)</sup>。

とお化仕立てが記された。翌年に成る図4には絞りの小袖の襟が二重に仕立てられる様子が見られる。当時、衤ばかりでなく全体に綿を入れ厚みを増し、大きな姿態となる過程で小袖仕立ての工夫がみられた。

## (2) 流行の袋物

日本橋本町2丁目の袋物商丸角屋次郎兵衛店は、「丸角」と称され紙入を専門に販売した。明和7(1770)年の洒落本『遊子方言』には、「おれが丸角めあつらへて。おゐた。花がん袋がある。」<sup>18)</sup>と記され、同年刊の『辰巳之園』にも、「鼻紙袋小菊三ツ折。丸角やが骨折の。利久形。」<sup>19)</sup>とあり、安永9(1780)年の『客者評判記』には、当世流行物として「だん々々かどもまる角やの紙いれ」<sup>20)</sup>を示し、後の洒落本にも鼻紙袋の丸角の名は残った。鼻紙袋は、鼻紙入とも紙入とも称され、懐中物として発達したのである。

### 1) 町人女性の紙入

鼻紙は、その名の通り鼻をかむ目的の他、文を書き、歌を記し、日常的には、枕紙として敷いたり、手拭き、拭い紙など広範囲で使用された。その種類も上等の小菊から漉き返した粗悪な浅草紙までである。特に遊女の必需品として宝暦年間(1751-64)の『陽台三略』では、

遊女専一大事

開中へ紙をはさみ候事。…女のたしなみの第一にて候。…女はこしけをゝく。…ゆふ女と名の付候身は。此はさみがみいたし候こといづくのうら々々までもおなじ事に候<sup>21)</sup>

と婦人病の対処に紙を用いた様子が記され、女性の生理用品としても紙は普及したのである。

鼻紙を懐中した姿は江戸前期より見られる

が、ここでは、鼻紙と鏡を携帯した点に着目したい。図5のように鼻紙は懐に納められ、これは男性同様であったが、女帯が発達し、帯幅が広くなると帯の前に立てるように変化した(図6)。寛政3(1791)年、山東京伝著『仕懸文庫』には、

はなかみ入をみすがみにてまき帯のまへゝたてニはさむ…(第二回)<sup>22)</sup>

小サなかみ入の中から黒ぬりにしたうぬほれかゞみを出してみながらかんざしでまへかみのほつれをなをしている(第四回)<sup>23)</sup>

とあり、黒塗りの鏡は図6と同様である。同8(1796)年の『養漢裸百貫』巻之三では、「鼻紙を取。其中にある鏡袋を取出して」<sup>24)</sup>と記され、同年刊の『かしく六三良見通三世相』でも

かみ入の中からくろぬりのうぬほれかゞみを出しかんざしで前かみのほつれをなをし<sup>25)</sup>

と自惚れ鏡が化粧直しに携帯されたことを記す。鏡袋や鏡の携帯は、江戸前期に京坂にみられ、後期に入って江戸に上方風が移入され化粧をこまめに直すために鏡の携帯が必要となったのである。『続飛鳥川』又追加では、「婦人の紙入にくさり文政より始る。」<sup>26)</sup>とあり、図7に鎖の飾りが出ている様子が確認できる。この頃には、鏡も金属製となり、ぶらと称する鎖飾りを付けたのである。

### 2) 武家婦人の箱迫

奥女中の紙入は箱迫と称され、文政13(1830)年、喜多村信節著『嬉遊笑覧』巻2中器用には、武家の女の用ゆるハコセコと云もの昔の紙入なり……はこせこは筥狹子なるべし箱にてせまき意にや<sup>27)</sup>

と記される。文化3(1806)年、式亭三馬の滑稽本『戯場粋言幕の外』には、奥女中の局の会話にみられ、

ドレドレ見ませう。…はこせこから眼鏡を出。してはなへはさむ<sup>28)</sup>

とあり、箱迫には化粧道具や筆などの筆記用具以外に眼鏡等の必需品を納めたようである。嘉永2(1849)年、瀧亭鯉丈著『花暦八笑人』五編下の巻には、

四十三四の奥女中……箱狭子の間より銀ぐさりのさがりたる……今一人は三十位いはねどしるき中老役……これも箱せこを胸の前につき出し<sup>29)</sup>

とその携帯の様子を記し、それは図8に見られる。さらに、明治14(1881)年献上、松平慶永編『幕儀参考』第2 婦人衣服其他制度の附属ノ

部には、

婦人カヒドリ、又ハ夏ノ提帯ノ時ハ必箱セコヲ用ユ。…角鏡ヲ入レ、其入レル物ハ、オシエナルモノニシテ、草花等或禽獣、源氏杯ノオシエニシテ、頗美麗ナリ<sup>30)</sup>。

と武家婦人の正装用装身具と記された。同25(1892)年、永島今四郎・太田賛雄著『朝野叢

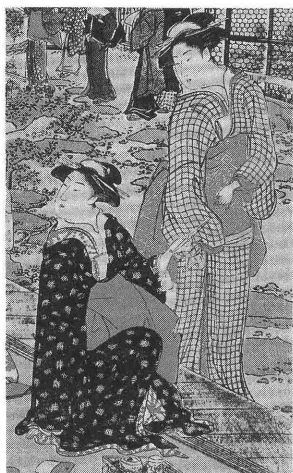


図5 紙入を懐中する娘たち



図6 鼻紙と鏡を帯に挟む女



図7 鎖のぶら付き紙入を携帯する女



図8 武家婦人の打掛姿  
正装用装身具として箱迫を携える。



図9 姫君の外出姿  
胴メを付けた箱迫を懐中する。



書千代田城大奥』上では、装飾品及小道具として、

御臺所以下襦を着くる者はいづれもハコセコを懷中にす…箱の中には紅、紅筆、懷中鏡、薬入などを蔵す…小菊の鼻紙十数枚重ねたるにくるみ幅一寸許りなる輪帯に挿し込み胴締にす<sup>31)</sup>

とあり、胴メは図9に描かれている。同時期の絵師が奥女中の外出姿を描いているが、ここまで詳細に箱迫を描くことは稀で、豊国の写実性が解されるのである。

### (3) 指輪

指の輪 唐山より渡りて近年こゝにて多くもてはやす、彼品は白銅などにて僂末なれば近頃は江戸にては銀にて作らせ用ゆ、何の用をなすことを知らず(『嬉遊笑覧』1)<sup>32)</sup>

と記され、指輪は指の輪と称され、当時の江戸では銀製の用いられた。前述の『傾城買四十八手』見ぬかれた手では、「今のさはぎでゆびの輪をおとしたそふだ」<sup>33)</sup>と記された。同年刊の山東京伝著『仕懸文庫』に「てめへ指の輪はうらみたぜもうやめにしろ」<sup>34)</sup>とあり、指輪は男女間の愛情関係が表現されている。現状では、図10を初見とする。当時、煙草入の根付などの細工は多くの絵師たちに描写されたが指輪にまで関心は及ばず、唯一豊国がそれに着目した点



図10 黒い指輪に笹色紅の遊女

は史料の希少性から評価される。

## 3. 豊国の美人画にみる背景描写

### (1) 鉢植物と生花

美人の傍に置かれた鉢植えの花や盆栽をはじめ愛猫家とも称せる猫の描写など豊国の美人画の背景には美的効果以上の意図がうかがえる。

寛政5(1793)年頃の「新板風流五節句遊・五月」では生花を競う二美人の姿が見られ、「生花」と題した作品もある。また、文政期の「あだな木性」では、大きな鉢植の花が背景描写され、そこには蝶が舞い、美女の艶やかさを強調させた。当時の世相を綴った随筆『続飛鳥川』追加には、

鉢植物、寛政の中頃より殊の外流行し、価も高直になり。其頃生花も流行せしなり<sup>35)</sup>

とあり、豊国が流行りの鉢植えや生花を取材し、先駆けて描写したのである。

### (2) 洗張と異国張

洗濯の光景は多くの美人画に描かれ、洗張も伸子張りにした様子が歌麿などにも見られる。



図11 異国張の前に立つ艶女

ここでは、着物をほどこいて洗い、糊をつけて、戸板に張った異国張を取り上げたい。元来、異国張は舶来品を洗張する特殊な方法であったものが、広く一般に行なわれ、化政期から特に江戸で流行した。文化8（1811）年、式亭三馬作『花江戸三芝居客者評判記』巻之中役者きどり二人のかけ合で、

麻のかゝつた着物もチト流行に後れたやつだ。しかも異国張にかけたやつだろう<sup>36)</sup>。

と記され、天保4（1833）年刊為永春水著の人情本『梅暦余興春色辰巳園』巻之七第二條では、

すぐに洗張やへもたしてやったが、しみも疵もなしにきれいになると<sup>37)</sup>

とあり、板張り仕上げは簡単な方法なので広く普及し、洗張屋も登場した。前掲の『花暦八笑人』四編上巻では、「少し明地があれば出来る事だ」「ヘン、洗張屋が見世を出すやうだ。」<sup>38)</sup>とその様子を述べている。図11は、洗い髪を掻き揚げる妖艶な女性の背景に異国張を描いたもので、背景に大きな鉢植えが配されたものもみられる。これは前述の流行であることから揃物の効果を背景描写に注いだ豊国の意義が読み取

れる。

### (3) 猫じゃらし帯と猫

豊国は、天明8（1788）年の「青楼座敷」、文化期の「女三のみや」、享和期の「猫を抱く美人」「炬燵美人図」に猫を描写している。当初、猫好きのためかと思ったが、猫じゃらし帯について、安永10（1781）年の洒落本『記原情語』に「猫じゃらし帯は女三のみやより出す」<sup>39)</sup>とあり、それを題材とした図12と照合できたことから猫にこだわる豊国の姿勢が捉えられた。

猫は、寛政・享和期の吉原の流行語となり、寛政12（1800）年の洒落本『青楼夜話廊数可佳妓』には、

市 外楼の客人はねこか 平 いゝへおたんちんのほふさ…此のごろのはやりことばほれたがねこすかぬかおたんちんといふノ也<sup>40)</sup>

と、自分の好きな遊客を表す言葉として広まった。同13（1801）年、『三千之紙屑』三帖に、

猫じや々々々々地廻り節は鼠とらずの新造を怒らしむ<sup>41)</sup>

とあり、「猫ちゃ猫ちゃ」は当時の流行唄として踊りも付けられたのである。猫の諺が多出するものこの時期であり、狸諺「傾城には猫が成る」から猫は傾城の罵称となり、遊廓の情景を猫を通して写したものと推定される。

### (4) 宣伝広告

みんな昔流行たさうだが、段々流行返るのだ。…一人ひねつた人が有て、昔物を見付出



図12 猫をつれた女三の宮



図13 風呂場の広告

すとネ、今の目には珍らしいから、サア能はと云て、一人着い二人着いして流行出すのさ<sup>42)</sup>。

(文化8(1811)年『浮世風呂』三編の下)と式亭三馬は、流行が繰り返されることを指摘している。彼は、文化7(1810)年に薬店「式亭」を開業し、同書に「延寿丹」をはじめ当時流行った化粧水「江戸の水」の宣伝を盛んにはじめた。式亭開店以降、英泉をはじめ多くの絵師たちが「美艷仙女香」などの宣伝広告を描いた。豊国が掛香を記した享和期の図13には、脱衣所に貼られた洗ひ粉の広告が見られ、それらを先行するものと推察される。黄表紙・滑稽本・合本の挿絵に描かれた情景描写が浮世絵に活かされたのもこの頃であり、その一躍を豊国が担ったといえよう。

## 結 言

以上より豊国の服飾描写にみる特性には、①写実性②独創性③流行の先導性が解明された。まず①は、豊国が歌川派に伝承した教授法が写実性を重視した西洋画の画法に基づく(『歌川列伝』<sup>43)</sup>点からも明らかであり、「当世の風俗を写す事妙を得たり」(『新增補浮世絵類考』<sup>44)</sup>と評価された。次に②は、題材や背景描写に顕著であった。彼の美人画に大首絵が少ないのは、その効果とみらせる。一方、図10の様にクローズアップされた指に指輪が映え、口元の笹色紅を印象付けた。最後に③は、彼が一貫して黄表紙等の挿絵に従事し、そこで世相を捉え、式亭三馬や山東京伝との親交を深めることで流行を察知し、それを先駆けて描写した点にある。すなわち、情報媒体としての浮世絵を先導したのである。

## 註

- 1) 日本名著全集刊行会編 日本名著全集11 黄表紙廿五種 日本名著全集刊行会 1926 P. 610
- 2) 日本名著全集刊行会編 日本名著全集14 滑稽本集 日本名著全集刊行会 1927 P. 1112

- 3) 神保五彌校注 新日本古典文学大系86 岩波書店 1989 P. 311
- 4) 大久保純一「歌川豊国の美人画—化政期を中心として」(秘蔵浮世絵大観9 講談社 1989 P. 266)
- 5) 拙稿「江戸時代後期の掛香に関する一考察」(文化女子大学紀要 第21集 1990)
- 6) 大久保純一 日本の美術 No. 336 豊国と歌川派 至文堂 1996 P. 20
- 7) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成13 中央公論社 1981 P. 217
- 8) 前掲6) 同書 P. 232
- 9) 日本随筆大成編輯部 日本随筆大成第2期11 吉川弘文館 1974 P. 224
- 10) 前掲2) 同書 P. 1112
- 11) 同書 P. 90
- 12) 同書 P. 102
- 13) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成11 中央公論社 1980 P. 59
- 14) 前掲2) 同書 P. 1112
- 15) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成15 中央公論社 1982 P. 237
- 16) 前掲15) 同書 P. 246
- 17) 前掲12) 同書 P. 18
- 18) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成4 中央公論社 1979 P. 351
- 19) 同書 P. 369
- 20) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成9 中央公論社 1980 P. 156
- 21) 前掲18) 同書 P. 170
- 22) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成16 中央公論社 1982 P. 24
- 23) 同書 P. 31
- 24) 同書 P. 282
- 25) 同書 P. 357
- 26) 前掲12) 同書 P. 42
- 27) 日本随筆大成編輯部編 日本随筆大成 別巻 吉川弘文館 1979 P. 332
- 28) 神保五彌校注 新日本古典文学大系86 岩波書店 1989 P. 311
- 29) 前掲2) 同書 P. 924
- 30) 明治百年史叢書 松平春嶽全集編纂刊行会編 松平春嶽全集1 原書房 1973 P. 439
- 31) 朝野新聞社 1892 P. 90
- 32) 前掲27) 同書 P. 281



- 33) 前掲22) 同書 P. 247
- 34) 前掲22) 同書 P. 31
- 35) 日本随筆大成編輯部 日本随筆大成第2期10  
吉川弘文館 1974 P. 34
- 36) 前掲2) 同書 P. 480
- 37) 前掲22) 同書 P. 309
- 38) 前掲2) 同書 P. 867
- 39) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成10 中央  
公論社 1980 P. 296
- 40) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成18 中央  
公論社 1983 P. 255
- 41) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成20 中央  
公論社 1983 P. 356
- 42) 前掲1) 同書 P. 610
- 43) 浮世絵八華6 豊国 平凡社 1985 P. 132
- 44) 前掲9) 同書 P. 224

#### 図版転載文献

1. 秘蔵浮世絵大観11 ジェノヴァ東洋美術館Ⅱ  
講談社 1988
2. 日本の美術 No. 366 豊国と歌川派 至文堂  
1996
3. 原色浮世絵大百科事典 第5巻 風俗 大修  
館書店 1980
4. 同書
5. 前掲1. 同書
5. 前掲1. 同書
6. 浮世絵八華6 豊国 平凡社 1985
7. 浮世絵にみる歯科風俗史 医歯薬出版 1977
8. 前掲1. 同書
9. 前掲2. 同書
10. 前掲6. 同書
11. 前掲6. 同書
12. 秘蔵浮世絵大観12 ベルリン東洋美術館  
講談社 1988
13. 前掲6. 同書